



幼児における遊びを通した学びとその進化

大阪成蹊大学 教育学部

准教授 松阪 崇久

子どもは遊びを通して様々な経験をし、仲間との関わり方やモノの扱い方などを学ぶ。他の霊長類と比べて成長期間が延長したヒトは、長い子ども期に遊びを通して様々なことを学ぶように進化してきたと考えられる。本研究の目的は、チンパンジーなどとの比較により、ヒトの遊びを通した学びの特徴を明らかにすることと、ヒトの進化における遊びの役割についての考察を通して、ヒトにとっての遊びの意義を再考することである。

人類の進化において教育制度が成立したのは、約 700 万年の歴史の中ではごく最近のことである。近代的な教育制度の成立以前の長い期間には、組織的な教育によらない遊びを通した学びが重要な役割を果たしてきたと考えることができる。ホイジンガは、ヒトの文化は遊びとして生まれ発展したと考え、ヒトの本質を遊びに見出したが、本研究では遊びを通した学びの観点から、ヒトの社会の成立における遊びの意義を考えたい。

(1) 「遊びを通した学び」における動物との連続性

まずはじめに、動物との共通性・連続性について確認する。

①動物の子どもにも「好奇心」がある：オトナは保守的であるのに対して、未成年個体が周囲の様々なものに興味を持ち、好奇心が探索的な遊びを引き起こす。

②動物の子どもにも遊びを通した様々な認知的な育ちがある：チンパンジーの乳幼児は多様な遊びを通して、身の周りの環境の特性や環境との関わり方を学ぶ。たとえば移動運動遊びは、採食・狩猟などの場面で必要となる様々な運動能力や空間認知能力の発達につながるだろう。多様な物を用いた遊びは、物の保持・運搬や道具使用に必要な技術を学ぶ機会になっているだろう。また、レスリングやくすぐりなどの社会的遊びを通して、乳幼児は他者との関わり方について様々なことを学ぶと考えられる。社会的遊びは、遊びの誘いやいざこざの解決などの社会経験ももたらす。

③動物の子どもは遊びにおける非認知的能力：動物の遊びでも、熱中・没頭や粘り強さといった非認知的能力が発揮される場面が見られる。石器を用いたナッツ割行動が知られるボソウウのチンパンジーは、3~5 歳頃まで自力でナッツを割ることができないが、うまくいかなくても繰り返し試行錯誤して挑戦し続ける。

④遊びを通した学びを支える「安全基地」：子どもが遊びに熱中するためには、心理的に安心できる環境が必要である。多くの霊長類では、母ザルが子どもにとっての心理的な支えとなる。母ザルとの安定した愛着関係が形成されると、母ザルが「安全基地」となり、子どもは安心してそこから少し離れて周囲の環境の「探検」に熱中し、探索的な遊びを通した学びの経験を積み重ねられる。

⑤遊びにおける社会的学習と遊びの文化：野生チンパンジーには、特定の地域集団で特有の遊びの文化の例が知られているが、これらは子どもが他個体から社会的に学習したものだと考えられる。

⑥遊びによるイノベーション：遊びは、それぞれの子どもにとって「環境との新しい関わり方」を見つけしていく過程だと捉えられる。そこで見つけられる行動は、既に群れの年長個体が習得したものであることが多いだろうが、新しい行動が生じることもある。このような例は、野生チンパンジーでもいくつか確認されている。

(2) ヒトの子どもは「遊びを通した学び」の特徴

A) 社会的な場面での遊びを通した認知的な学び

①関心の共有を通した学び：ヒトの子どもは、遊びの中で他者と関心を共有することを通して様々なことを学ぶ。乳児は生後 9 ヶ月頃になると指さしをして、他者と関心を共有しようとする。養育者が乳児と同じモノを見て（共同注意）、それを触る様子を見せたり、名前を言うことから、乳児はモノとの関わり方やモノの名前を知ることができる。また、モノをあげたり見せに行ったり（三項関係）、見慣れないモノがあった時に養育者の表情を見るなど（社会的参照）、ヒトの子どもは大人を巻き込んで環境との関わり方を学ぶ。これらはチンパンジーには見られない。ヒトの子どもは、遊びにおいて他者と関心を共有することによって、様々なことを学ぶように進化しているのだと言える。

②教育による学び：遊びにおいて教育的援助が見られる場合がある。霊長類も社会的学習が知られているが、教える側から子どもへの何らかの関わりかけのある教育行動が知られていない。赤ん坊に玩具を持たせるなど、遊びを豊かにする関わりを伴う教育は、霊長類の系統では人類の遊びで生じたものだと考えられる。

言語を用いた組織的な教育が始まる前にいくつかの教育の段

階があったと考えられる。促進的教育は、子どもの学びの機会を用意することを指す。玩具や道具などを子どもに与えて、使い方を学ぶ機会を作る、大人の技術を見て学ぶ機会を与える（見本提示）などである。ナチュラル・ペダゴジーと呼ばれるものもある。アイコンタクトや呼びかけ、マザリーズなどがあると、子どもはそれを知識伝達場面だと捉え、他者の言動から一般性のある知識を学ぶとされている。子どもの行為に対してうなずく、ほめ笑む、叱るなどの正や負のフィードバックを与えるのも原初的教育の一種だと捉えられる。

B) 遊びを通した社会的側面の学び

①ルールのある遊びを通した学び: 霊長類の遊びでも「規則性」が見られることはあるが、ルールに基づいて勝ち負けを競う遊びはヒトにしか見られない。チームに分かれて勝負を競う集団対抗型の遊びも、ヒトの特徴である。遊びの参加者が遊びを楽しめないと、遊びは長く続かない。そのため、皆が楽しくなるように、その時の状況に合わせて遊びのルールが柔軟に調整されることがある。遊びのルールは、遊びにおける競い合いをより楽しいものにするために発達・変化してきたと考えられる。

②想像遊びを通した学び: チンパンジーとは違い、ヒトでは想像の世界を楽しむ遊びが発達している。ヒトの幼児は、想像のイメージを他児と共有し、互いの役割を認め合って遊びを協力して発展させる（協同遊び）。いろいろな役割になり切る遊びを通して、幼児は様々な他者の視点を理解するようになると考えられる。

③遊びを通して他者の視点を考える: かくれんぼ、だるまさんが転んだなど、ヒトには遊び相手の視点を考える遊びが多数ある。くすぐり遊びはヒトとチンパンジーに共通してみられるが、ヒトの養育者はくすぐられる赤ん坊がより楽しく興奮できるようにくすぐりのタイミングを変化させるのに対して、チンパンジーではこのような調整は明確には見られない。他者の心の状態を理解する能力はヒトに特徴的に発達していると言えるが、ここで触れたような遊びを通してその力が育っていくと考えられる。

(3) ヒトの進化における遊びの役割

①遊びを通した学びの期間の長期化: ヒトの成長期間が長期化し、遊びが長期化したのは、複雑化した狩猟・採集や石器の技術など、遊びを通して学ぶべきことが増え、時間が効率的になったからだと考えられる。技術が徐々に高度化するにつれて、遊びを通した学びと、学びの共有や教育の重要性が増したと考えられる。

②遊びや好奇心が生むイノベーション: 成長期間の長期化により、遊びの中でイノベーションが生じる期間も長くなったと考えられる。ヒトの好奇心の高さは、外の世界への「冒険」や「旅」を引き起こし、新しい環境との出会いが新たなイノベーションを促進したという考え方もある。

③集団での学びの共有と累積: 成長期間の長期化に加えて、学びを集団で共有し、累積するようになったことが、人類の文化の発展につながったと考えられる。組織的教育の成立以前の長い期間に文化の発展を支えたのは、遊びを通した学びの共有だったであろう。また、集団サイズが大きくなったことは、集団内のイノベーションの発生を促進し、文化の累積も容易にしたはずである。

④共に生きる社会を形成する遊び: ヒトの遊びは、様々な人が共に生きる社会を形成することに貢献してきたと考えられる。ルールのある遊びは、ルールにただ従う姿勢を育てるのではなく、他者を思いやってルールを調整することや、皆で楽しめるルールを他者と協調して考える姿勢を養うことに寄与してきたと考えられる。また、様々な役割になり切る想像遊びを通して、子どもたちは他者の視点を理解し、思いやる姿勢を身につけられる。

芸術も、同様の機能を果たしてきたと考えられる。絵画・造形・音楽・舞踊といったヒトの芸術表現は、環境との関わり（遊び）の中で発見した新鮮な感覚や、美しさなどを表現することを通して、他者とその喜びなどを共有しようとする行為だと言える。

(4) 現代の子どもの育ちのための遊び

最後に、遊びを通したヒト本来の学びの在り方から、これからの教育を考えるヒントとなるものを提示したい。

①学びを支える社会集団の重要性: ヒトの遊びを通した学びは、他者による関心の共有や援助によって深められる点に特徴があった。人類社会の維持・発展において、子どもたちの学びを支える社会集団の存在が重要だったと考えることができる。

子どもの遊びを通した学びを支える役割を担ってきたのは、母親だけではない。父親や祖父母、兄・姉や地域の者たちが育児に協力し、多くの年長者が子どもと関わる環境が効率的では普通だった。このような環境が現代の日本では失われつつあるため、それを補う場を作ることが求められる。保育においては、異年齢保育を導入する園も多いが、地域においても同様に、地域の人が集まれる遊び場が求められる。子どもの遊びに関わる際には、大人は子どもに興味を押し付けるのではなく、子どもの関心に寄り添い、共感しながらそれをより深める方法を考えることが重要である。

②社会を作るための遊びの重要性: 本来は遊びを通して学ぶべきことが、遊びを抑制する学校現場などでは学べなくなっている可能性がある。とくに、遊びを通した社会的側面の学びは重要である。様々な人間が共に生きる社会を作っていくことは、現代社会の重大な課題の一つである。幼児教育で「垣根」や「人間関係」においてこのような学びが重視されているが、小学校以降の教育では教科の学びが中心となり、この重要な部分が軽視されやられている。遊びを通した社会性の育ちについて、学校現場でも改めて考え直す必要がある。